様式（１０）

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲　保 第　　４０　号 乙　保	氏　　名	土井　さゆり
審査委員	主　査　　安井　敏之 副　査　　森　　健治 副　査　　友竹　正人		

題　　目

Classification of physical activity in patients with heart failure categorized as New York Heart Association class I or II （心疾患を原因としたNYHA Ⅰ～Ⅱ度の心不全患者の身体活動の類型化）

著　　者

Sayuri Doi, Ayako Tamura, Takako Minagawa, Akemi Osaka, Masataka Sata:2020年2月発行 The Journal of Medical Investigation Vol.67, No.1, 2に発表予定

要　　旨

心不全患者の多くは症状の増悪による入退院を繰り返し，心機能の低下に伴い運動耐容能が低下する。しかし，症状をコントロールしつつ日常の身体活動を維持することができれば，健康寿命を延伸することが可能である。本研究の目的は，心疾患を原因としたNew York Heart Association (NYHA) Ⅰ～Ⅱ度の心不全患者の身体活動を類型化することである。対象者は，循環器内科外来および入院中の患者70人であり，患者基本情報，診療録から得た臨床情報，および信頼性と妥当性の確認されている質問紙の健康関連QOL尺度(SF-8)，身体活動能力質問スケールSpecific Activity Scale：SAS，心疾患患者の自己管理測定尺度を用いて検討した。分析は，単純集計を行った後，SASを用いた日常生活における身体活動耐容能のレベルや内容の類似性に着目し，Ward法による階層性クラスター分析法を用い分類した。クラスター分析により分類された群別の心不全患者の基本情報と臨床情報，SF-８，自己管理測定尺度の比較をχ^2検定，Kruskal-Wallis検定で行った。身体活動耐容能としての心機能検査では，brain natriuretic peptide(BNP) とNYHAで有意差を認めた。自己管理では日常の散歩やラジオ体操などの活動に有意差を認めた。クラスター分析し３群に分類したそれぞれの特徴は，身体活動耐容能が高く自己管理がほぼ完璧なタイプ，身体活動耐容能中等度であるが日々の運動や自己管理を積極的に行わないタイプ，身体活動耐容能が低く日々の運動は比較的頑張るが自己管理を他者に任せるタイプであった。NYHA Ⅰ～Ⅱ度の心不全患者において，3群のタイプの特徴を明らかにし，BNPを用いた身体活動耐容能評価と自己管理の特性に合わせた指導を行うことで，心不全の症状をコントロールできる可能性が示唆された。

以上の内容は，NYHA Ⅰ～Ⅱ度の心不全患者の身体活動の症状コントロールにおいて，類型化した3種類のタイプの特徴とタイプ別指導の必要性が示唆され，心不全患者の看護支援への基礎的資料を提供することが期待でき，その社会的意義は大きく博士の学位授与に値すると判定した。